

屋根を覗く家

千葉研究室 海法 圭



■ 屋根裏に感じる「不自由な身近さ」と「自由な奥行き」

天井に 20cm ほどの穴を開けてみた。

穴の向こうには暗くくすんだ屋根の裏側の面が覗く。明るい天井面とは対照的に、全てを飲み込まんとするブラックホールは、日常的な風景を無に帰す漆黒の終点のように見えると同時に、あちら側に無限の広がりをもたせさせる煌びやかな始点のようにも見えた。



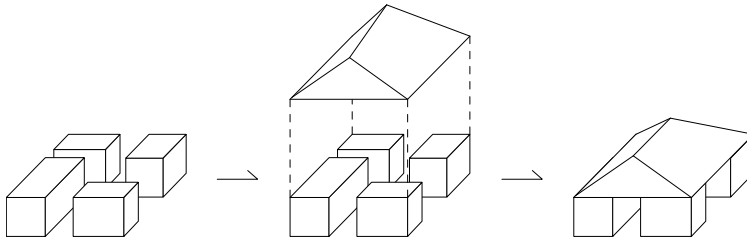
「屋根裏」という名の空間が魅力的なのは、どの部屋の上にも存在するのに、意図して台か何かに乗らなければ手が届かなそうな「不自由な身近さ」と、屋根裏を通して思いがけない部屋に辿り着けそうな「自由な奥行き」を同時に感じとれるからではないだろうか。

「屋根裏」の特徴といえるこの「不自由な身近さ」と「自由な奥行き」を上手く利用して、家の中の 2 つの異なる空間が、はなれている気がするのに、実はある距離感をもってつながっている状態をつくり出せないだろうか。

屋根を覗くことで、距離感がゆらぐ家考えた。

■ ルール

「分散させた複数の空間を、上から大きな屋根を覆いかぶせてつなげる」

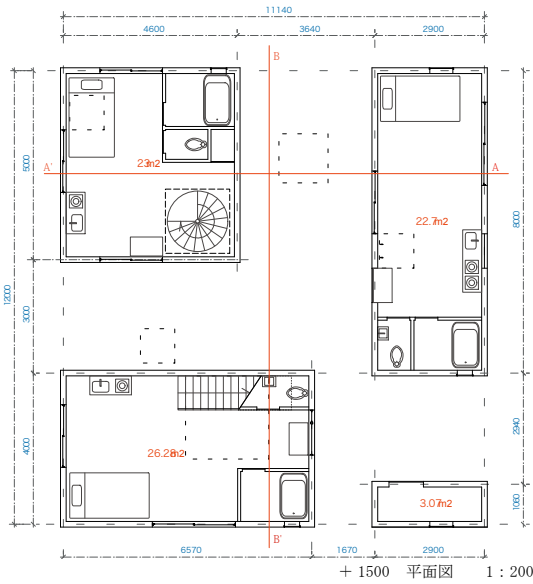


一階部分でははなれのように独立した空間が、屋根裏の大きな一室空間によってズルリとつながっている。

一階の空間の大きさはそれぞれ原則 25 m²前後のワンルームであり、各部屋に庭のような外部空間が隣接している。

部屋と屋根裏は、天井に穴をあけて、階段かハシゴでつながる。一階のそれぞれの部屋がキッチン、バス、トイレなどのインフラを持ちうるようにできている。部屋ひとつのみでも生活が可能だし、全体を一つの家のように使うこともできる。

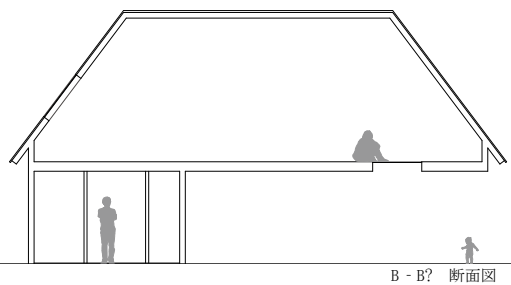
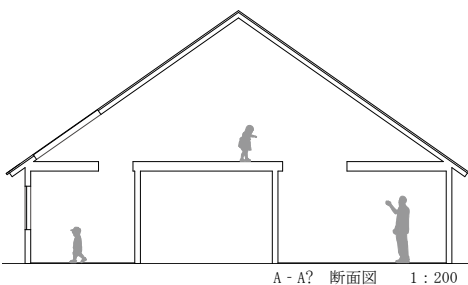
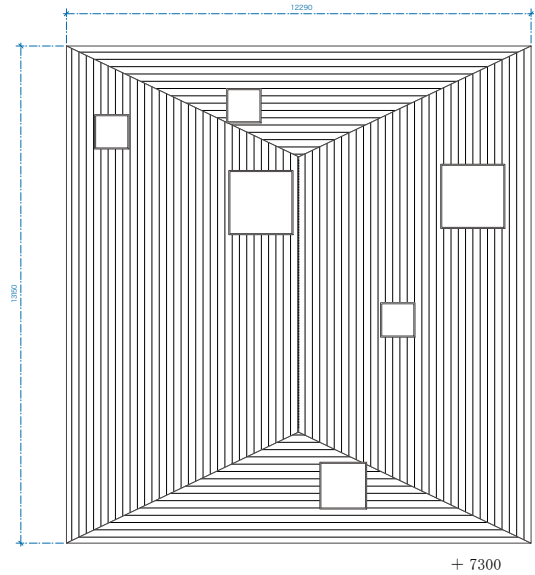
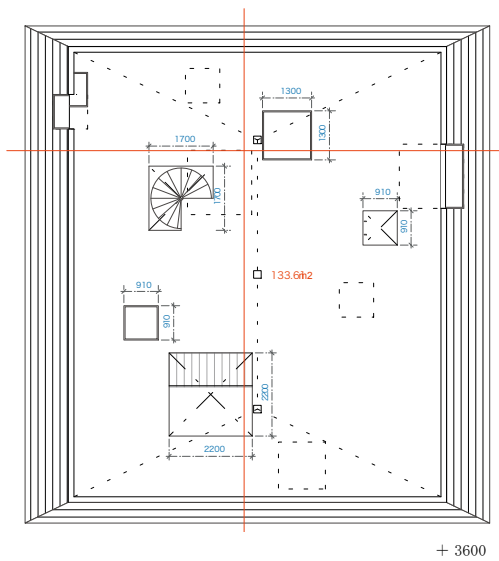
■ プランニング例 二人でシェアリング+ゲストルーム付き



25 m²前後の部屋が3つと、共用の物置が1つあるタイプである。3つの部屋は、その空間の形や、開口の開き方、屋根裏とのつながり方に違いをもたせている。また、全ての部屋にキッチン、バス、トイレをつけた。

知人と二人でシェアして、一つをゲストルームにしておいて、屋根裏は共有のリビングのようにして使う。

延床面積 : 208.66 m²
建築面積 : 133.61 m²
1階面積 : 75.05 m²
屋根裏面積 : 133.61 m²



■ 生活シーン

具体的に、生活の場面を想像してみたい。

部屋から庭が見える。部屋にいるときは、他の部屋と視線の交わりはない。

屋根を覗くと、見えない向こう側の部屋で人の気配がした。

どうやら友人が帰ってきたようだ。

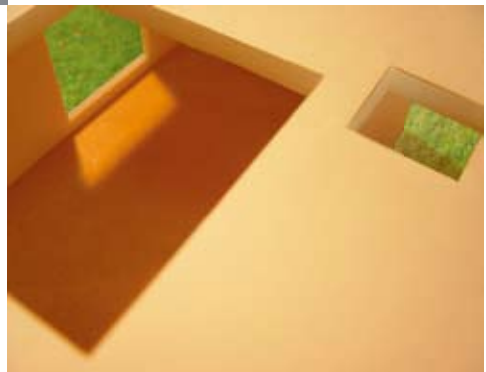


屋根裏に上ると、だだっ広い一室空間が広がる。

一人のときはここで日の光を浴びながら読書するのが好きだが、友人と話したいときはいつの間にか屋根裏にいる気がする。

床に開いた穴からは各部屋や庭の様子を感じとることができるし、屋根に開いた穴からは空を仰ぎ見ることができる。

庭を見下ろすと、猫がお気に入りの場所で昼寝している。



庭から屋根を覗く。

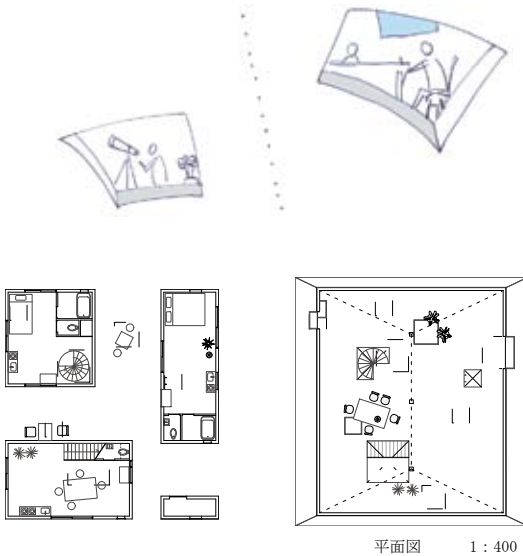
夜になると、屋根裏の照明が庭を優しく照らし出す。

■ 展開

屋根裏の空間は、決まった機能のないがらんどうの空間でありたい。それはつまり、さまざまな住まい手の許容が、結果として屋根裏の使われ方に反映されることを意味する。

ここでは屋根裏の使われ方を焦点に、多様な住まい方の例を見てみたい。

① 家族が自然と集まる屋根裏（母+息子夫婦+孫）



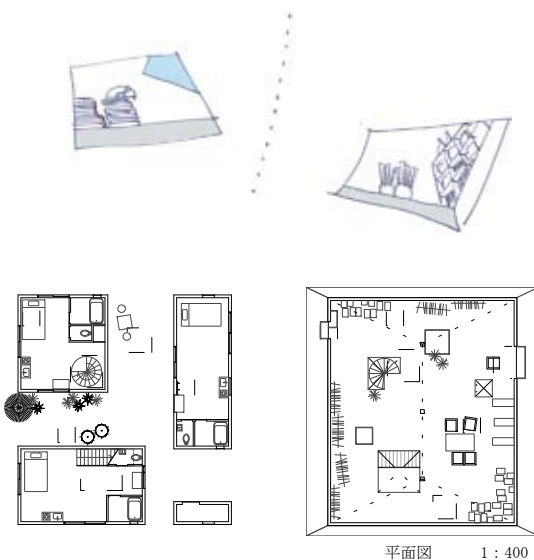
部屋の一つは私が、一つは息子夫婦と孫が、もう一つはダイニングとして使っている。ダイニングは日中は息子の嫁が内職の仕事場として使っている。

夕方になると、みんな自然と屋根裏に集まりだす。孫の幼稚園のできごとを聞くのが何よりの楽しみだ。

夜になって息子が職場から帰ってきた。孫は傍らで天体観測をしている。小学校に進学したら、ちょうどよいタイミングだし、独立した部屋の一つ使わせてあげようかと息子の嫁と相談しているところだ。

68歳 女

② 巨大収納だけど、ときどき語らう屋根裏（大家+賃貸）



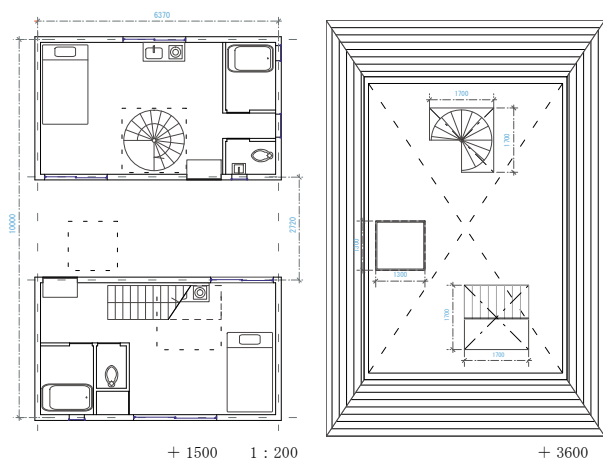
賃貸といっても普通の賃貸は面白くない。もう少し人とふれあえる家を探していた。

この大屋根は意外と借主から好評で、鉄道模型を好き勝手置いて走らせる人や、大量のレコードを段ボールごと置く人もいて、屋根裏にいろんな人の人となりがあふれ出している様子が面白い。

ときどき人生や勉強の相談にのってあげると、人と話したいと思っている若者が実は意外と多いことに気づく。

56歳 男

また、より狭小な敷地においては、もう少し建築面積が小さい住宅も成り立つだろう。



1階の部屋は二つになる。

単身者なら、一方を住まい、他方を働く場（オフィス、アトリエなど）またはゲストルームとして使う単身者や、特殊な事情をもつ夫婦などが住めるだろう。

延床面積：110.08㎡
建築面積：63.7㎡
1階面積：46.38㎡
屋根裏面積：63.7㎡

■ 「高さ」と「近さ」

屋根裏空間の特質である「不自由な身近さ」と「自由な奥行き」は、「高低差による自由／不自由」の問題と、「屋根裏の奥行きによる部屋間の近さ／遠さ」の問題の二つの指標に読み替えられることに気づく。つまり、「高さ」と「近さ」というモノや空間を語る上でごく当たり前に出てくる指標によってプロトタイプを考えていたわけだ。

屋根の「高さ」でのみ家全体がつながることで、部屋と部屋間に二種類の異なる「近さ」が存在する家になったように思う。そして二種類の「近さ」を備えた家は、前述の展開例を見れば分かるように、さまざまなカタチをとり得る単独世帯を広く許容する構造であるといえる。

この二種類の「近さ」は、住み手が自分のライフスタイルや世帯のカタチ、人間関係に応じて、好ましい方の「近さ」を選択できるというような二項対立的な存在に一見見えるが、実はそうではなくて、両者は常に存在していて、日々の生活で同時に感じられるような相補的な存在であってほしいと思う。例えば住み手が一方の「近さ」を疎ましく（または好ましく）思ったときに、屋根裏の使い方を変えるだとか、読書する場所を変えるだとか、住み方をほんの少し変えるだけで住み心地が変わり、実はその行為が結果としてもう一方の「近さ」に寄りかかっていたというのが両者の望ましい関係であると思うのだ。

都合の悪い「近さ」が切り捨てられることなく、二つの「近さ」同士がお互いを補いあう調整機構のように働くこと。さらにその調整が、住み手の日々のライフスタイルの変化を許容するかたちで行われることが、「屋根を覗く家」が理想とする生活像である。

日々の移ろいや、生活のしかたに敏感になれる家。

人やモノと住む楽しさに意識的になれる家。

それが実現されて初めて、「屋根を覗く家」はプロトタイプの一つの解といえるのだろう。